

2023年 北区青少年交流団 ウォルナットクリーク市派遣報告書

日時

2023年(令和5年)7月28日(金)～8月7日(月)



 北区

目 次

1	北区青少年交流団について	p.1
2	団員名簿	p.2
3	事前研修・説明会・結団式	p.3
4	派遣日程	p.5
5	ホストファミリー名簿	p.6
6	交流活動の概要	p.7
7	帰国報告会	p.13
8	団員報告書	p.14

※ 本報告書に掲載している写真は、北区が記録のために撮影した
写真及び団員から提供された写真を使用しています。

1 北区青少年交流団について

北区は、ウォルナットクリーク市（アメリカ合衆国カリフォルニア州）にあるセブンヒルズスクールと、長年にわたり中学生の相互訪問交流を行ってきました。

両自治体は、2017年（平成29年）4月25日、この交流の一層の発展を目指してパートナーシティ協定を締結し、文化、教育をはじめ幅広い分野における相互理解と連携をさらに深めていくこととしました。

この締結を機に、北区は、毎年夏休みに区内在住の高校生を青少年交流団として同市へ派遣し、現地の青少年との交流やホームステイを通じて、相互理解と友好親善を深める事業を開始しました。

2020年（令和2年）からは、新型コロナウイルス感染症の影響により、現地への派遣を中止していましたが、2023年（令和5年）は、4年ぶりに7月28日（金曜日）から8月7日（月曜日）まで、高校生12名を同市へ派遣し、現地交流を再開しました。

今回の派遣では、団員はホームステイによる異文化生活の体験や、現地の青少年とアートワークショップなどを通じた交流を実施しました。さらに、同市議会を訪問し、英語で北区のプレゼンテーションを行い、北区の魅力を発信するなど、友好親善の礎としての役割を立派に務めました。



2 団員名簿

氏 名		学 年
岩城 亜弥香	AYAKA IWAKI	高 2
榎本 良音	RYO ENOMOTO	高 2
川西 穰	JO KAWANISHI	高 2
佐藤 千咲	CHISAKI SATO	高 2
杉原 夕咲	YURA SUGIHARA	高 3
関 百楓	MOMOKA SEKI	高 1
瀬戸 陽菜乃	HINANO SETO	高 1
武内 沙恵	SAE TAKEUCHI	高 2
吹上 紗季	SAKI FUKIAGE	高 1
宮川 結夢	YUME MIYAGAWA	高 2
向井 七織	NAO MUKAI	高 1
米澤 和花	WAKA YONEZAWA	高 2

(敬称略)

3 事前研修・説明会・結団式

・ 第1回説明会

日時 5月27日(土) 午後1時30分～2時30分

場所 中央公園文化センター 学習室D

内容 団員紹介、ウォルナットクリーク市との交流経過について、
スケジュール、諸手続きの説明

・ 第1回英語事前研修

日時 5月27日(土) 午後2時30分～4時30分

場所 中央公園文化センター 学習室D

内容 英語でのプレゼンテーション準備(プレゼンテーションの基礎)

・ 第2回英語事前研修

日時 6月10日(土) 午後2時～4時

場所 北とぴあ 901会議室

内容 英語でのプレゼンテーション準備(北区の紹介)

・ 第3回英語事前研修

日時 6月24日(土) 午後2時～4時

場所 北とぴあ 802会議室

内容 英語でのプレゼンテーション練習

・ 結団式及び第 2 回説明会

日時 7月8日（土）午後1時30分～2時30分

場所 北とぴあ 第1研修室

内容 区長挨拶、団員紹介、英語でのプレゼンテーション披露、
旅のしおり（旅程及び注意事項など）の説明

・ 第 4 回英語事前研修

日時 7月8日（土）午後2時30分～4時30分

場所 北とぴあ 第1研修室

内容 英語でのプレゼンテーションまとめ



結団式の様子

4 派遣日程

2023年度 北区青少年海外交流団 渡米旅程

日程		時間	予定	宿泊先
7月28日	金	14:30 17:05 10:40	成田空港 集合 サンフランシスコ国際空港へ出発 (UA838) サンフランシスコ国際空港着 ・専用バスにて市内を視察後(ゴールデンゲートブリッジ、フィッシャーマンズ・ワーフなど)ホテルへチェックイン(15:00頃)	ホテル (1泊)
7月29日	土	10:50 11:40 午後	・ホストファミリーと対面 Hotel (Residence Inn by Marriot) TEL: (925) 433-5215 2050 N California Blvd, Walnut Creek, CA 94596 ホストファミリーと過ごす	
7月30日	日	午前 午後	ホストファミリーと過ごす アメリカの学生とDiablo Japanese American Clubにてお祭りに参加 https://www.diablojaclub.com/summer-festival	
7月31日	月	9:00 12:15	9:00 - 12:15 pm CENTER for COMMUNITY ARTSにてセラミッククラスに参加	
8月1日	火	9:00 17:45 18:00 20:00	・9:00-10:30 Tour of Leshner Center ・10:30-11:30 Downtown Public Art tour ・13:00-14:00 Tour of Police Department ウォルナットクリーク市役所訪問 アメリカの学生と自由時間 17:45 市役所集合 18:00 市議会にて ・北区長のビデオメッセージ ・北区についてのプレゼンテーション ・市議会にて記念撮影 ・18:00-20:00 市議会を見学	
8月2日	水	10:00 15:00	アメリカの学生とUC Berkeley 訪問	
8月3日	木	終日	ホストファミリーと過ごす	
8月4日	金	9:30 16:00	アメリカの学生とサンフランシスコの視察 San Francisco Exploratorium の体験 Ferry Buildingでの昼食	
8月5日	土	13:00 13:00 20:00	ホテル集合 Oakland A's vs Giants 観戦(16:00 - 19:00) ホテルへチェックイン	ホテル (1泊)
8月6日	日	7:30 12:00	集合→専用バスでサンフランシスコ国際空港へ 成田空港へ出発(UA837)	
8月7日	月	14:45	成田空港到着予定	

5 ホストファミリー名簿

氏 名	ホストファミリー
岩城 亜弥香 向井 七織	Weiss
榎本 良音	Battah
川西 穰	Battah / Tamori-Ward
佐藤 千咲 宮川 結夢	Huthman
杉原 夕咲	Mercado
関 百楓	Pickering
瀬戸 陽菜乃 米澤 和花	Khaund
武内 沙恵	Swanson
吹上 紗季	Shah

6 交流活動の概要 ※時間は現地時間

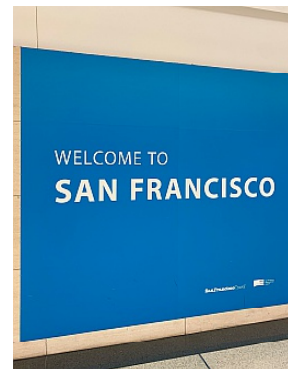
・ 7月28日(金)

14:30 成田空港集合

17:05 サンフランシスコ国際空港へ出発

10:40 ※ サンフランシスコ国際空港に到着

空港からバスでサンフランシスコ市内へ。



フィッシャーマンズ・ワーフを視察

16:00 ※ ホテル Residence Inn by Marriot 到着

・ 7月29日(土)

10:50 ※ ホストファミリーとの対面式

みんな緊張していましたが、迎えに来てくれたホストファミリーに英語で挨拶できました。



出典：Marriott Bonvoy HP

- 7月30日(日) 一日、各自、ホストファミリーと過ごしました



Diablo Japanese American Club の夏祭りに参加した団員

- 7月31日(月)

9:00 ※ CENTER for COMMUNITY ARTS にてセラミッククラスに参加



粘土でボウルを作り、素焼きした
作品に自由に絵付けをしました



・ 8月1日 (火)

9:00 ※ アートツアーに参加

13:00 ※ ウォルナットクリーク市役所&警察署訪問



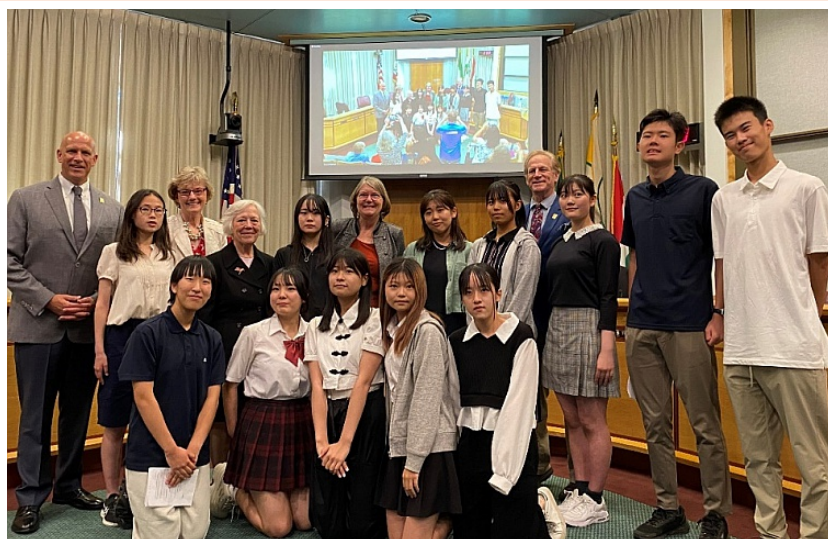
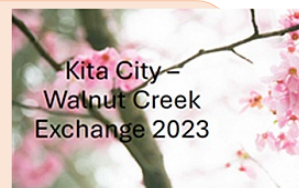
様々なアートに触れる



警察署での説明

18:00 ※ 市議会で北区についてのプレゼンテーション

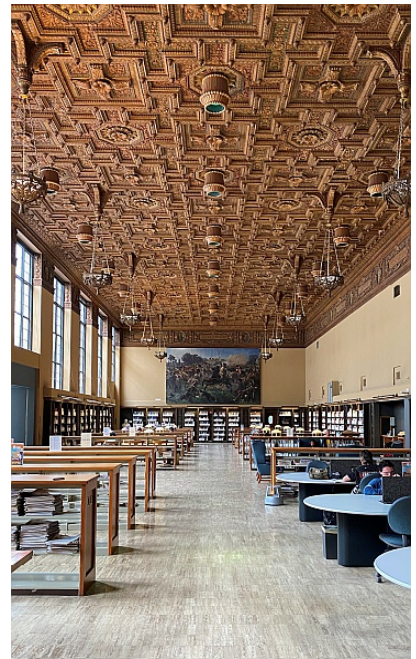
団員は、ウォルナットクリーク市議会という大きな舞台で、市民の皆さまに北区の魅力を表現力豊かに伝え、傍聴人から大きな拍手をいただきました。



北区についてのプレゼンを終え、市議会議員との記念撮影

・ 8月2日 (水)

10:00 ※ カリフォルニア大学 (UC Berkeley) を訪問



現地の学生やホストファミリーと広大なキャンパスを散策。開放的な図書館。

・ 8月3日 (木) 一日、各自、ホストファミリーと過ごしました

・ 8月4日（金）

9:30 ※ サンフランシスコ市内へ



サンフランシスコベイエリアにある化学博物館（Exploratorium）を訪問

・ 8月5日（土）

13:00 ※ ホストファミリーとのお別れ



多くのホストファミリーが見送りに来てくれました。

13:30 ※ Oakland Athletics vs San Francisco Giants 観戦

アスレチックスの本拠地の
スタジアムでメジャーリーグ
を観戦。



• 8月6日(日)

8:30 ※ バスでサンフランシスコ国際空港へ

12:00 ※ 成田空港へ出発

• 8月7日(月)

16:00 成田空港に到着



アートツアー中のひとコマ

7 帰国報告会

- ・ 日時 8月24日(木) 午後3時30分～4時

場所 北区役所 庁議室

区長に、ウォルナットクリーク市での思い出やホームステイ先の家族との交流のこと、体験したことを上手にまとめ、堂々と報告しました。

区長からは、「ホームステイや市議会への訪問などを通じ、多くの人と交流し、互いの文化を理解し合えたことは、忘れられない思い出になったことと思います。これからの長い人生の中で、今回の経験が生かされることを願っています。」とコメントがありました。



8 団員報告書

岩城 亜弥香

榎本 良音

川西 穰

佐藤 千咲

杉原 夕咲

関 百楓

瀬戸 陽菜乃

武内 沙恵

吹上 紗季

宮川 結夢

米澤 和花

※ 明らかな誤字等の修正を除き、可能な限り原文のまま掲載しています。

「ホストファミリーの紹介」

この夏、私は最高の家族に出会いました。受け入れをしてくれたのは、3歳と6歳の女の子がいる Weiss さん家族です。

ホストファミリーに会う前日、私はひどく緊張していました。実際に会って上手く会話ができるかどうか心配で仕方がなかったのです。しかし、そんな不安は一瞬にして吹き飛びました。彼らは笑顔で私たちを迎え入れてくれました。

ホストファザーはとても親切で、日本語が上手でした。せっかくの機会なので基本は英語で話してもらいましたが、困った時はすぐに助けてくれて心強かったです。

ホストマザーは常に元気で優しく、様々な面でサポートしてくれました。彼女の明るく温かい笑顔は、いつも私を安心させました。

そして2人の女の子は活発で、可愛い天使のようでした。お話をするのが好きで、負けず嫌いで、とても優しくて。私はそんな2人が大好きです。

彼らなしでは素晴らしい経験はできなかったと思います。一緒に過ごす時間は楽しく、充実したものでした。またいつか会える日を楽しみにしています。

「かけがえのない経験」

帰国してから約1ヶ月が経った今、あの日々は既に懐かしく感じられます。

ホームステイどころかアメリカに行くこと自体が初めてで、出発前は楽しみな気持ちと緊張や不安が入り乱れていました。ただ、終わってみると楽しかった思い出で溢れています。

信号の渡り方も買い物の仕方すらもわからない状態でしたが、それすらも楽しかったのです。日本にいれば、未体験のことに触れる機会は少ないように感じますし、もちろん横断歩道も渡れて買い物だって簡単にできます。一方、知らないことだらけで、誰も私のことを知らない。そんな別世界に来たような不思議な感覚に心が踊りました。

派遣期間中、たくさんの人と出会いました。ホストファミリーをはじめ、現地の学生や、お店の店員さん。きっと1人で旅行に来るだけでは、こんなに人と交流する機会はなかったと思います。ホストファミリーがいつも私のことを気遣ってくれ、色々な経験をさせてくれたこと。少し疲れが出て元気がなかった時、訪れたチョコレート店の店員さんが温かい声をかけてくれたこと。「あなたに出会えたから今日は良い1日だった」と言ってくれる方がいたこと。関わった全ての方が親切で、その優しさにとっても救われました。

実際にアメリカで過ごしてみても日本との違いも実感しました。ゴミ箱が街中に多く設置されているだとか、乾燥した気候なので人工芝が多いだとか、本を読むだけではわからない些細な違いが興味深かったです。

また、家に帰ってから個人的に少し驚くことがありました。ホストファミリーとお別れする際に撮った写真を見ていた時のことです。私は以前から写真を撮られることが苦手で、カメラを向けられると上手く笑うことができませんでした。そんな私が、その写真では笑っていたのです。

他にも、気軽に人に話しかけられるようになったり、英語を話すことのハードルが下がったりと、良い影響をたくさん受けました。自分の中の何かが変わる、そんなきっかけをくれたこのプログラムに感謝しています。

今回の経験は私にとって忘れられない大切なものになりました。素敵な機会をありがとうございました。



「ホストファミリーの紹介」

私は 10 日間 Battah 一家（父 Shadi、母 Carisa 夫妻と Sami(8)、Ramzi(6)と Zayne(4)の三兄弟）のいる家に 8 日間お世話になりました。とても活動的な一家で、家族全員がサッカーをやっており、自宅にあったフットサルコートで時間を見つけてはここでサッカーに明け暮れていました。ちょうどサッカー女子ワールドカップが開催されていたので、その話題に花を咲かせたりもしていました。また、他にも子供たちはチェスの習い事に行っており、僕も将棋が好きなので一緒にチェスを打ったり将棋を教えたり楽しい時間を過ごしました。

家も印象的で、さながらリゾートホテルかと思えるほど綺麗だったのです。一際驚いたのは自家用のプールで、事前に「家にプールがあるから水着持ってきてね！」とホストマザーから言われていたのですが、そのプールが家にあるとは思えないほど本格的で、広さがおおよそ縦 10m、横 5mほどあって水深も 2m以上あったのです！日本では家でプール遊びをする、といったらビニールプールのような簡易的なものを使うと思うのですが、さすがはアメリカ。スケールの違いに感動を覚えました。

「非日常」

小洒落た街並みと賑わう海辺の街であるサンフランシスコ、閑静で落ち着いた住宅街が広がるウォルナットクリーク。見るもの全てが新鮮で、カメラロールには 1 枚、また 1 枚と次々に新たな写真が刻まれていくようなとても楽しいアメリカンライフを送っていましたが、前半と後半で僕の旅は大きく姿を変えてしまいました。

初めてアメリカの大地を踏みしめて、日本と違い気候が涼しくて冷房無しでも快適に過ごせることに静かな感動を覚えつつ、初日はサンフランシスコ観光を楽しんでいました。時間の都合上思うように行きたい場所には行けませんでした。画像でしか見たことがなかった場所に行けるのはとても目新しいものでした。

ホテルにて一夜を明かした後、早速ホストファミリーと合流してホームステイ生活の始まりです。ファミリーは全員僕を温かく受け入れてくれたのですぐに打ち解けることができ、前述の通り初日からサッカーやプール遊びを楽しんでいました。僕は英語力がそこまで高くはなかったので日常会話の中でもわからないところが多々ありましたが、向こうもそのことを察してか色々と気遣ってくれたので特に問題なくその後の何日間かは過ごすことができました。

しかし、ちょうどプログラムも折り返しを迎えることになった 6 日目の朝、38℃を超える高熱を出してしまってその後はほとんどの日程をベッドの上で過ごすことになってしまいました。時差もあり気候も違う場所へ行ったことで体への負担が大きかったのか、日頃の不摂生が災いしたのかわかりませんがなかなか熱は引かず、咳も激しくなっていました。万が一のために荷物に処方箋は入れておいたのですが、症状が重くと思うほどの効果は得られず、最終的には引率として来ていた IES の田中さんと区の職員の中村さんに救急外来まで連れてってもらい、そこでようやく熱が引いて落ち着くこととなりました。当時お二方はプログラムの関係でサンフランシスコに行っていたため、わざわざ 2 時間ほどかけてホストファミリーの家まで戻っていただく形となってしまいました。このように、迷惑をかけてしまったわけですが、田中さんは「貴重な経験だね！」と励ましてくださいました。いかに自分が周りの人に支えられているのかを、非日常の空間において改めて痛感することとなりました。本当に感謝しかないのでこの場を借りてお礼申し上げます。田中さん、中村さん、ありがとうございました。

最後に。Battah 一家が咳の酷い僕のために作ってくれたジンジャースープの味は生涯忘れないと思うほどに身体にも心にも沁みました。まさにこの温かい家族を象徴しているかのようです。病気の僕を嫌な顔一つせずに、看病してくれた彼らには感謝してもしきれません。「あまり観光できなかつたからまたおいで！」最後 Carisa はこう言ってくれました。今度は万全の状態で、いつかもう一度友人として遊びに行きたいと思いません。



「ホストファミリーの紹介」

今回の訪問で、私は 2 つのホストファミリーにお世話になりました。Battah 家と Tamori-ward 家です。

最初に 3 日間滞在した Battah 家には、Shadi・Carisa 夫妻と Sami・Ramzi・Zayne の三兄弟、そして 2 匹の犬がいました。中庭にプールや離れがあるような、とても広い家でした。また、子供が多く、常に賑やかな雰囲気がありました。

Shadi さんは、ヨルダン出身の医療従事者の方でした。妻の Carisa さんと同じく、とてもフレンドリーな方で、滞在中にはさまざまな話題で会話が弾みました。Shadi さんの教育の方針から、子供たちは算数やスペイン語、中国語、アラビア語、さらには日本語など、さまざまな勉強をしていて、まだ小さいのにとても立派だと思いました。

短い間ではありましたが、とても有意義な滞在になりました。

Battah 一家と別れた後は、Tamori-Ward 家に 5 日間滞在しました。Tamori-Ward 家には、Nick・Stacy 夫妻と Jonathan・Tylor の兄弟がいました。兄弟のうちで最年長なのは Alex ですが、陸軍の仕事でハワイに赴任中とのことで、会うことはできませんでした。その他、Diablo Japanese American Festival の会場近くに Stacy さんの両親がお住まいで、そちらにも何度か伺いました。

Jonathan・Tylor の兄弟は、カードゲーム、VRゲーム、さらには庭でのエアガンの撃ち合いなど、さまざまな遊びに誘ってくれました。Nick・Stacy 夫妻も、日本には店舗のないレストランに連れて行ってくれたり、自由時間の行動などで自分の希望を通してくれたりと、私のためにいろいろと手を尽くしてくださいました。

密度の濃い、そしてとても思い出深い 5 日間になりました。

「脚下照顧」

7月28日から8月7日にかけて、私は北区青少年交流団の一員として、アメリカ・カリフォルニア州のウォルナットクリーク市を訪問しました。

胸を高鳴らせながらサンフランシスコの空港に降り立つと、すかさず入国審査の長蛇の列に並ぶことになりました。空港職員はてきぱきと動かず、客のほうもその不便さに慣れている様子で、さっそくアメリカの洗礼を受けたように感じました。

空港からはバスに乗り、フィッシャーマンズ・ワーフの Pier39 に向かいました。名物のクラムチャウダーを食べた後、アシカを見に行きました。私たちが見られたのは3、4匹だけでしたが、かわいらしい姿にとても癒されました。

2日目の朝、一つ目のホストファミリーである Battah 家に合流しました。Battah 家はとても広く、家の中に小さなサッカーコートやプールがあるほどでした。

Battah 家の子供たちはサッカーが大好きで、3日間何回も一緒にサッカーをしました。ソファに座って、一緒にサッカーの試合を見ることもありました。

Battah 家での最後の晩、Shadiさんと2人で、犬の散歩がてら近所を歩きました。会話を通じて、アメリカの国債を世界一多く保有している国は日本なので、日本経済の状況がアメリカ経済にも大きく影響すること、アメリカの大学はとても学費が高いこと、リスニングの学習には実際に英語圏で暮らしてみることが一番であることなどを教わりました。子供抜きで、落ち着いて話せた貴重な機会になりました。

4日目、2つ目のホストファミリーである Tamori-Ward 家に合流しました。

ルートビアフロートを飲みながら家族全員で映画を見たこと、Tylor 君の誕生日を一緒に祝ったこと。サンフランシスコ市内の観光に行き、その帰りに激しい渋滞に巻き込まれたこと、Stacy さんのお父さんと Martinez という田舎の港町に行ったことなど、Tamori-Ward 家での楽しい思い出は枚挙に暇がありません。

今回の滞在を通じて学んだことは、アメリカ文化や英語の表現をはじめとして、多岐にわたります。しかし何よりも実感したのは、「渡航前にもっと日本文化を学んでおけばよかった」ということでした。Tylor に「柴犬のシバって何の意味？」と聞かれたとき。平家物語を読んでいた Nick さんに「無常観」について質問されたとき。セラミッ

ククラスにいた小学生に、「鬼滅の刃」や「推しの子」のストーリーの話題を振られたとき。私はうまく答えることができませんでした。「脚下照顧」とでもいうべきでしょうか、自国の文化について、少なくとも今よりもっと詳しくなれば、海外の方との会話が弾むうえ、確固たる比較対象を得て、自分の異文化への理解も深まるのではないかと考えました。

最後になりましたが、素晴らしい事業を企画してくださった北区の皆さんと、お世話になったホストファミリーの皆さんに心から御礼を申し上げます。



7月末から8月にかけての約10日間、私は北区青少年交流団海外派遣の団員として、ウォルナットクリーク市にホームステイをした。

ホストファミリーは4人でイルーナという犬を飼っていた。私と同年のアニサは、バレーボールが好きで、高校で男子バレーのお手伝いをしている。身長差や体格差があるにもかかわらず、男子バレーで活躍する姿は目を見張るものがあった。また、アニサの母と祖母もバレーボールをしていたらしく、私のホストファミリーはバレーボール一家であった。ホストファミリーはみんな家族愛に満ちており、私たちと出かけた際には両親が2人で仲良く手を繋ぎ、話しをしている姿をみた。アニサの弟のデックランは、ゲームとポケモンが好きで部屋にはたくさんのポケモンのぬいぐるみが飾ってあった。デックランは祖父母の家に滞在していたため、あまり話す機会はなかったが、私がゲームが好きなこともあり、すぐに仲良くなれた。

私は初めての海外経験だったため、長期間のフライトや英語での生活に慣れておらず、ホームステイ初日から体調を崩してしまった。しかし、ホストファミリーは、私の拙い英語を一生懸命理解しようとしてくれて、どうしても伝わらないところは翻訳機などを用いて、私を気遣ってくれた。幸い、数日後には体調が戻り、アメリカの生活をじっくりと肌で感じることができた。

また、アニサは高校で日本語の授業をとっていて、アニサの高校の友達とも出かけた。アニサ達は日本の映画を授業で見る機会があったようで、とても話が弾んだ。

アニサとは博物館や映画館など様々な場所を訪れた。アメリカの映画館は日本よりもリクライニングの設備が整っており、つい寝てしまいそうになった。その他にも一緒にバレーボールをしたり、ショッピングをしたりした。また、家でゆっくりする時もあり、ゲームや映画をみて楽しんだ。あっという間の1週間であった。

ホームステイの最後の夜、ホストファミリーと庭でマシュマロを焼いて食べた。私はいい焼き加減で完成したが、アニサとアニサの父はマシュマロを焦がしてしまって、何

度も焼き直していたのには、みんなで大笑いした。マシュマロを食べながら、ホストマザーが最後にどこか行きたいところはあるかと訪ねてきて、本当にお別れになってしまうのだと実感し、どっと悲しみに襲われ、その日の夜はあまり眠れなかった。

最後の日、私は家族と友人にたくさんのお土産を買った。お土産を購入する際には、アニサのおすすめのお菓子やアイテムを教えてくれて、楽しい最後をむかえた。

ホストファミリーがホテルまで送ってくれて、本当にお別れのときがきた。こんなにも仲良くなれたのに、もうなかなか会えないのだと思うと、自然と涙がこぼれた。

涙で顔がぐちゃぐちゃになっていたが、ホストファミリーとハグを交わして、なんとか笑顔でお別れする事ができた。

今回のこの海外派遣を通じて、私は様々なことを学んだ。

日本とアメリカにおける生活の様式の違い、価値観の違い。そういった文化的な違いを学べたことは、私の知識、見解を広げてくれたといえる。しかし、なによりも人種や性別に関係なく、ホストファミリーと仲良くなれたことが純粹に嬉しかった。まだ、この世の中には人種による差別や偏見が少なからずある。そういった、差別、偏見を無くすためにはどうしたらいいのか。その答えをこの海外派遣で学んだ。答えは簡単である。相手も理解しようと歩み寄ることだ。人間は未知なものを恐れ、排除しようとする。相手を理解し、お互いに歩み寄ることができたなら、この世の中から、差別、偏見がなくなるのもそう遠い未来ではないのかもしれない。



「ホストファミリー紹介」

私のホストファミリーは、17歳の女の子ルーシーとお兄ちゃんと両親の4人と、犬のオレオ1匹の家族だった。海外留学中のお兄ちゃんと、お兄ちゃんのところへ旅行中のママは不在だった。

ファミリーは以前、日本に住んでいたことがあり、パパもルーシーも日本語がとても上手だった。ホームステイの始めの方はアメリカ人の会話スピードだとどうしても英語が聞き取れない時があった。そんな時ルーシーはゆっくり話してくれたり、日本語で伝えてくれて、英語にも徐々に慣れていった。

また、ルーシーは私と同じ年とは思えないほど面倒見が良かった。私のことをいつも気にかけてくれて、少し疲れていると直ぐに「大丈夫？」と声をかけてくれたり、食事のメニューの内容が分からない時には、一つ一つ丁寧に何が入っているかを教えてくれたりと、ルーシーは優しくとても頼りになり、滞在中になくってはならない存在になった。

また、ルーシー一家はとても日本が好きで、階段筆筒をテレビ台代わりにしていたり、囲碁盤があったり、アメリカの家なのに日本色が強くどこか安心感があった。

ルーシーは「日本の大学に行く事が夢だ」と言っていた。来年、ルーシーが日本の大学生になり再会出来ることをとても楽しみにしている。

「ホームステイを終えて」

10日間のホームステイでたくさんのことを学んだ。ここでは主に3つ紹介する。

1つ目は、多様性についてである。共に過ごしたホストフレンドの中にノンバイナリーの17才の人がいた。その子はノンバイナリーを公言し改名をしていた。それを地域や社会が受け入れ、自他ともに無理なく生活できることにわたしは衝撃を受けた。その子と話す中で、見た目でも性別を判断したり、男女という2つの性別で分ける行為が知ら

ぬ間に人を傷つけていることがあり人間は多様化していることを学んだ。そのため、日本でもLGBTQなどの性的マイノリティの人が生活しやすくなるように学校教育はもちろん、偏見を捨てる環境作りが重要だと思った。

また、「お母さんが家事全般を行う」という日本ではポピュラーな日常が、アメリカには無いことに気がついた。お母さんが料理を作る時もあればお父さんが料理を作る時もあり、洗濯や掃除などの家事を分担してみんなでやっていることにとても驚いた。わたしが滞在中はママが不在だったので、パパとルーシーとで家事を分担していた。日本でも男性も家庭に入ったり、家事をすることを当たり前にする必要があると感じた。

2つ目はアメリカ人のコミュニケーション力の高さだ。駅で電車を待っている時に知らない人に話かけられて色々な話をした。私たちが日本人で英語が上手ではないことを知った上で沢山話しかけてきてくれた。他にも買い物をしている最中に急に声をかけられて、商品についての感想を求められたり、買うべきかを一緒に考えたりしてくれた。日本では考えられない光景でとても新鮮だった。

また、ホームステイを通して単語や文法だけ覚えていても会話は成立しないことを痛感した。逆に言えば相槌を入れたり目を見たり伝えようとする気持ちがあれば言葉が違っても通じることを学んだ。

3つ目は日本の文化の大切さだ。現地で開催されていた日本のコミュニティのお祭りに参加した。そこでは盆踊りや和太鼓の演奏、華道のショーを見学することができた。どのブースもとても賑わっていた。特に華道のショーは日本で生活していても見る機会がないくらい詳しく説明され、日本人の私でもとても勉強になった。そこで日本の文化の大切さを学び、それを受け継いで行く必要性を感じた。

参加するまでは受験を控えた高校3年の夏休みに行くべきかととても迷った。しかし日本で机と向き合いながら勉強しているだけでは学ぶことができないことをたくさん体験できた。この体験で発見した日本の課題や良さを糧に、今後の北区や日本の発展に向けて、将来の目標である公務員になりたいと改めて強く思った。そして私のように、地元北区が主催するイベントをきっかけに学びを深め、優しい社会や豊かな将来を考える高校生が増えることを期待する。



「ホストファミリーの紹介」

私のホストファミリーは Pickering 家でした。メンバーは気さくなお父さん Justin、優しいお母さん Monique、日本のアニメが好きな姉 Sienna、何をしてもかわいい弟 Rylan の4人です。

渡米前から、食べ物好みや行きたいところをメールで聞いてくれるなど、よくしてもらいました。実際にお会いしても4人とも明るくて優しく、すぐに家族の一員として溶け込むことができました。わずか7泊だったとは思えないほどたくさんのおところへ連れて行ってきて、いろいろな経験をさせてもらいました。

Pickering 家は、日本が大好きな家族です。日本に行ったら北区の桜を見に行きたいそうです。また、日本に行くときには連絡をくれると言っていたため、今度は私が日本を案内してあげたいです。すごく素敵な家族で、帰国してからも Justin、Monique それぞれとメールをしています。これからもずっと連絡を取り合いたいです。

Love Pickerings !!!



「北区青少年海外交流団としての派遣を終えて」

私は4年ぶりの北区青少年海外交流団として、アメリカサンフランシスコの Walnut Creek 市に行ってきました。

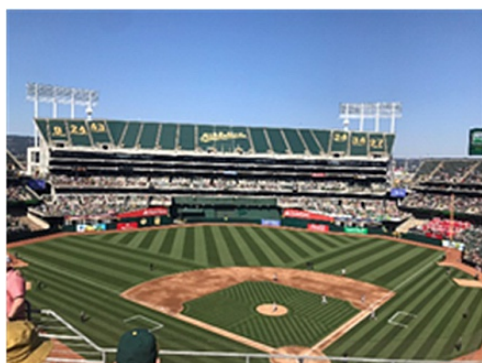
交流団として、現地の市役所や警察署、UC Berkeley 大学などを訪問しました。また、私はメジャーリーグを2回も観戦することができました。ホームランボールがすぐ

近くに飛んできたときは、興奮して思わず立ち上がってしまいました。近くで見るゲームは迫力がすごく、今でも脳裏に焼き付いています。メジャーリーグを観戦した思い出として、サンフランシスコジャイアンツの帽子を買いました。

市議会にも参加し、交流団の皆で北区の魅力についてプレゼンテーションをしました。私は北区が誇る「桜」についてのスピーチをしました。緊張しましたが、練習したように話すことができました。また、スピーチを聞いて下さっている方がうなずいているのが見えて、自分の英語が伝わっていると分かり、嬉しく感じました。これらの経験から、今よりさらに英語の勉強に力を入れ、国際的に活躍できる大人になりたいと思いました。

私は海外に行った経験がなかったため、渡米前は意思疎通ができるか、食事が口に合うかなど心配なことがありましたが、心配なんて全く不要でした。私がこの11日間で体感したことは、自分の話す英語は海外でも通じるということです。これまで学校で英語を学んできましたが、ALTの先生以外の外国人と話す機会はなく、自分の英語が現地の人に伝わるのか不安でした。しかし、ホストファミリー以外の人と話す機会がありましたが、会話では詰まることなく話せたため、自分の英語に自信ができました。今回の経験のおかげで、人前で英語を話すことに躊躇することがなくなりました。

最後に、今回この事業に関わってくださった方々、とても良い体験をさせて下さり本当にありがとうございました。たくさんの忘れられない経験ができました。今後も北区とWalnut Creek市の関係が続き、この派遣事業も続いてほしいです。派遣団としてのこの経験を活かし、グローバル化が進む現代の社会に少しでも貢献できるように頑張ります。



「Cherise 家について」

まずは今回私を受け入れてくれた、ホストファミリーの Cherise 家を紹介しようと思います。Cherise 家にはお父さんの Sandy、お母さんの Cherise と Kai、Robyn、そして犬の Taiger lily がいます。

Sandy はロックバンドの NIRVANA が好きで私に数曲ロックの曲を教えてくださいました。夕食後にはみんなでリビングに集まり、お互いの好きな曲を紹介したりと、家中が音楽であふれておりこの 10 日間で洋楽への興味が増したように感じます。母の Cherise はいつも明るく、フレンドリーで、なにかトラブルがあったときなどにいつも私を優しさで包み込んでくれました。Kai は初めての海外に慣れない私をよくサポートしてくれました。初日に Kai の提案で Robyn と Kai と私でカードゲームを行ったのですが私はすぐに姉妹と打ち解けることが出来ました。Kai は日本語を学んでおり、お互いに言語のスラングや各国の文化を教えあうことでステイ中に言語、文化の理解を深められたと感じています。九月にまた Kai が日本に来る予定なので今度は私が Kai を支えられるようになりたいです。

私はこの 10 日間本当にホストファミリーに助けられました。親切に、家族同然に接してくれた家族に感謝をしたいです。

「つながり」

私は小さい頃からアメリカの言語、文化に興味があり、実際にこの目で見てみたい、感じてみたいという理由でこの事業に応募しました。

実際に九時間ほどのフライトを経て、サンフランシスコ国際空港に着いた日の高揚感を私は今でも鮮明に覚えています。初めての海外で、風土も言語も全く異なる場所で多少の不安がありましたがこの事業に参加した仲間や北区の職員の方々、ホストファミリーが支えてくれたおかげで素敵な 10 日間を過ごすことが出来ました。

私はこの10日間、ホストファミリーだけでなくウォルナットクリークの方々と深く関わることができました。

私のホストフレンドの Kai は紹介文にも書いた通り、日本語を勉強中でステイ中に何度も日本語と英語そして各国の文化を教えあいました。特に教科書だけではわからない、日本語や英語の単語がもつ独特なニュアンスを相手にどう伝えるかを考えることがとても面白かったです。また Kai はかなり日本の文化に興味があり、いくつか質問をされたのですが日本に住んでいる私でもわからない質問があり、自分の自国の文化への理解が未熟であることを感じ日本文化への理解を深めようとするきっかけになりました。

あるプログラムで出会った Hailee と Will はアメリカの高校、大学のスタンダードな姿や現地で流行っているアーティスト、曲をよく教えてくれました。ステイ中の空いた時間には現地の子と一緒にショッピングや映画館、レストランに行くことができました。特にアメリカでは「Barbie」という映画が人気で、コンセプトのピンクの服を身に纏いリクライニングシートでゆったりと映画を鑑賞するという日本の映画館とは一味違う経験が印象に残っています。

その他にも、私が滞在期間中に出会えた人はたくさんいます。街の様子や街で話しかけられた人からアメリカの文化を学ぶこと、そして私の英語を褒めてくれることもあり言語学習に対するモチベーションが大幅に向上しました。渡航前にはかなり心配していた英語でのコミュニケーションも過ごしていくうちにだんだんと慣れて、冗談まじりの会話もできるようになり嬉しかったです。しかし、自分の言いたいことをより正確に相手に伝えられるように、よりコミュニケーションが弾むようにこれからも英語の勉強に励みたいと思っています。

これらの10日間での気づきはきっと日本で過ごしている中では得られないものだったと私は考えています。私はこれからも英語、他国の文化を学び、大学生になったらまたアメリカを訪れたいと今回の渡航を通してより一層強く思うようになりました。このような素敵な機会を提供して下さった北区の職員の方々、団員のみんな、そして Cherise 家、ウォルナットクリークで出会えたすべての人に感謝をしたいと思います。

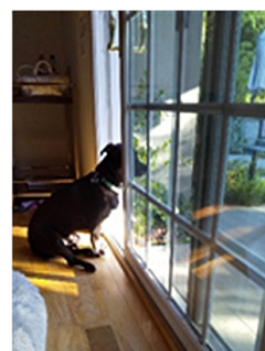


「ホストファミリーの紹介」

私は Swanson 家にホームステイさせていただきました。お父さん、お母さん、16 歳の Willa と 14 歳の双子の Greer と Natalie (3 姉妹) の 5 人家族で、可愛い黒い犬 Gus と Ollie もいました。また、おじいちゃん日本人のおばあちゃん (渡米 49 年) も近くに住んでいて、最後の夜には私に会いに来てくださり嬉しかったです。家族は皆、私が過ごしやすいように気配りしてくださり感謝の気持ちでいっぱいです。

同じ年の Willa とは、庭のプールで一緒に泳いだり、ドラマを見たり、UC Berkeley にも一緒に行きました。また、日本語を習っていて、おばあちゃんがいらした夜には 3 人で英語と日本語を使いながら話し、アメリカの事をたくさん教えてもらいました。

Greer は、おっとりとした性格で優しく、食事を作ってくれたり、一緒にパズルをして遊んだりしました。Natalie はとても明るく学校のことやサッカーの話など会話が弾みました。Gus と Ollie は、いつも駆け寄ってきてくれてとても可愛かったです。また、お父さんや三姉妹と犬の散歩に行くのも楽しかったです。



「大切な思い出」

このプログラムを開催するにあたり、選考から報告会まで、たくさんの方々のサポートを受け無事に終えることができたことに感謝しております。

私は、滞在中、英語力向上のため、「翻訳アプリを使わないこと」と「毎日英語で日記を書くこと」を目標にしました。ホストファミリーもゆっくりとわかりやすい話し方で、私がわからない時には、違う表現に言いかえて下さったので、わからない単語を調べるだけで、翻訳ア



ブリを使わずに過ごせました。これからも、英語でスムーズに会話ができるよう努力していきたいです。この報告書は日記の中から印象的だったことを抜粋しました。

1日目 サンフランシスコに到着 フィッシャーマンズ・ワーフ観光

ユナイテッド航空のCAの方々はとても陽気で、私達に話しかけてくれ、機内から、海外の雰囲気を感じられました。入国審査は厳しく、私が今まで行ったことのある国と違い驚きました。フィッシャーマンズ・ワーフでは、名物のクラムチャウダーを食べました。サワーブレットとスープの相性がよく、おいしかったです。

2日目 ホストファミリーと対面 Japanese festival

ホストファミリーと対面する際は、緊張していましたが、笑顔で迎えて下さり、ほっとしました。午後は日本のお祭りへ行き、和太鼓や盆踊り、書道の実演や生け花の展示を見ました。私は10年以上書道を習っているのですが、とても興味深く、いつか海外で書道の魅力を伝えたいと思いました。

3日目 ホストファミリーと過ごす

海辺を歩いて、ゴールデンゲートブリッジを見に行きました。橋だけでなく、周りの街並みや、山の景色もすごくきれいでした。サンドイッチの量が多く、日本の2倍くらいあると感じました。

5日目 シティーツアー・市議会でのプレゼンテーション

ユニークな壁画やオブジェ、ストリートピアノがたくさんあり、歩いていてとても面白い町でした。市議会では、現地のグループのプレゼンテーションの話すスピードの速さ、聞いている人たちのリアクションの大きさに驚きました。

事前研修で準備し練習していた団員との「北区についてプレゼンテーション」が終わった後は、達成感がありました。

6日目 UC Berkeley 訪問

自然に囲まれた落ち着いたキャンパスで、功績を残した人の顔が記された建物、生物学の校舎の外壁には動物が彫刻されていて、日本の大学とは違った雰囲気印象的でした。



7日目 ホストファミリーと過ごす

午前中は、水族館と博物館の複合施設へ行き、午後はダウンタウンにショッピングへ行きました。カリフォルニアの沖合に生息している魚や、サンフランシスコ地震の展示など日本では見られない展示がありました。

滞在中の貴重な体験を通し、アメリカの文化や習慣を肌で感じることができ、異文化への関心がさらに高まりました。機会があれば、今後も北区とウォルナットクリーク市の架け橋になるような活動に参加したいです。

「ホストファミリーの紹介」

私が今回のプロジェクトでお世話になったのは、Shah 家です。お母さんの Shachi、お父さんの Jesal、双子の兄妹の Saaj と Hailee の 4 人家族です。ご家族が本当に優しく、たくさん助けてもらいました。

お父さんとお母さんはインド出身で、家ではインドの文化に触れることができました。夕食にはインドの料理を食べて、食材や香辛料について教えてもらったり、インドでの生活や神話について教えてもらったりしました。またたくさん送り迎えもしてもらいました。Saaj はスポーツが好きで特にテニスが上手です。テニスの動きを教えてもらったり、一緒にバスケやバドミントン、卓球をして楽しんだりしました。Hailee とは一緒に観光したり、アニメを見たり、お互いの友達の話をしたりして楽しみました。日本語を勉強していたので、英語を教わりながら私も日本語を教えることができました。今でもメールや電話のやり取りをしていて、お互いに最近あったことや学校のことを伝えあっています。

渡米前は英語で会話ができるか心配でしたが、私のつたない英語をくみ取ろうとしっかり聞いてくれたり、私が理解できたか確認してくれたり、丁寧にコミュニケーションをとってくれたので、安心しました。初めてのホームステイで緊張していた私に、優しく接してくれたとても温かいご家族です。

「私の初体験」

この 11 日間で 1 番大切だと感じたのは、初めてのことに積極的に挑戦することです。なぜなら、初めての経験を通して新たな発見や学びを得られたり、楽しんだりできるからです。

私はホストファミリーの家で、初めてインドの文化に触れました。今までインドの文化について興味を持ったことがなかったので、貴重な経験になりました。初めて会った

日にバラタナティウムというインドの伝統的なダンスを見に行かないかと聞かれました。インドのダンスを見たことがなくて興味を持ったので、ぜひ行かせてほしいとお願いしました。見たとき、今まで見てきたダンスとは違い、手足の動きが優雅かつダイナミックで、指先からつま先まで体全身を使って感情が表現されているところに圧倒されました。初めて食べたインドの食事では、「やはり辛い」と思いました。しかしただ辛いのではなく、材料によって少しずつ香りや辛さの具合、感じ方が違うことに気づきました。しかしそれは日本も似ていて、しょうばいといっても、塩、醤油、味噌、更に作られる方法や生産地によって味が違うように、インドでは色々な辛さがあるのです。初めての料理が多くて、とてもおいしかったし、楽しかったです。

二つ目の初体験は、ストリートピアノです。私は幼いころからピアノを習っていて、人前で弾いたことはありましたが、街の人たちの前で弾いたのは初めてでした。街中の壁画やオブジェなどを見るツアーのとき、ガイドの方がストリートピアノの前で、「ピアノを弾く人はいませんか」と私たちに聞きました。他に手を挙げていない人がいなかったため私が弾くことになりました。「いつも何度でも」を緊張しながらも弾き終えたとき、拍手をしてもらってとても恥ずかしかったです。ガイドの方が「感動して泣いてしまった」と言ってくださいました。以前私は、自分の能力を人前で見せびらかすようなことは恥ずかしく、少し調子に乗った行動だと思っていました。しかしそんなことはなく、自分の行動で相手を喜ばせられたことを誇らしく思いました。自分の能力を生かして人の役に立てるようになっていきたいです。

このような経験は今回行かなければ決してできませんでした。この事業に参加できて本当に良かったです。今回の事業に関わり、支えてくださったすべての方に感謝しています。本当にありがとうございました。



「ホストファミリーの紹介」

私のホームステイ先のホストファミリーは父、母、娘、息子、わんちゃんの5人家族でした。特にホストシスターのアニサは同じ学年でアメリカでは常に一緒に行動してくれていました。また、アニサは抹茶が大好きで、飲み物は常に抹茶フラペチーノでした。私も抹茶は大好きなので共通点を見つけて嬉しかったです。家は広くてまるでシルバニアファミリーのような雰囲気の家でした。わんちゃんはおばあちゃん犬でおっとりしていると思いきや、すごく元気なわんちゃんでもとても可愛かったです。

弟のデクランは祖母の家はずっと泊まっていたのであまり会えませんでした。本当に日本の小学生と変わらないとても元気のある子でした。

ホームステイ先での1番の思い出はペルシャ料理を振舞ってくれた事です。

お米にビーフ、トマト、ヨーグルトを乗せて混ぜて食べるものでした。それをホストファミリーとその祖父母とホームパーティの様な雰囲気を楽しみました。また、夜の庭で炭を燃やしてマシュマロを焼いてそれをチョコとビスケットで挟むスモアというスイーツを食べさせてもらいました。夜の寒い空気と火の暖かさがマッチしてとても趣のある空間で幸せを感じることができました。ホストファザーのマイケルが休日の時には車でサンフランシスコまで連れてきてもらい、ゴールデンゲートパークという博物館のような場所に連れてきてもらいました。水族館や動物園、恐竜など本当にたくさんありました。そこにはジャパニーズガーデンという場所もあり、鳥居や橋、鯉など日本を感じさせる雰囲気のある場所もありました。私がホームステイしてる時に言われて1番嬉しかったことがあります。それは、ホストマザーのイヴァンナから「ここはあなたたちの家だと思って自由に使っていいからね」と言われたことでした。そこで私たちのことを受け入れて安心させようとしてくれる優しさにとっても胸が暖かくなりました。初めてのホームステイですごく不安だったけど、Huthman's familyのおかげで最高の思い出を作ることができました。



「10 日間の留学」

私は初めて日本から出てアメリカへ留学に行きました。

行けるとわかってから英語は完璧に話せなくても大丈夫かなー！と軽く考えていました。しかし、いざ行ってみると本当に自分の英語力のなさが分かりました。

自分の伝えたいことが伝わらないし、何より環境が違いすぎて慣れるのも大変でした。

会う前はとても緊張していて、上手く話すことができるかとても不安でした。家に着くとすぐにお昼ご飯の用意をしてくれて、食事中は会話を楽しみながらすると知っていたので話を用意していたのですが、なかなか上手く話せず、無口のまま 1 日目の食事は終わってしまいました。その後、用意してくれた部屋に戻り、あと 8 日間も上手く過ごせるかとても不安な気持ちになりました。でも何もアクションを起こさずに終わるのは勿体無いと感じ、次の日からルームメイトと一緒になんとか話してみようと試みました。上手く伝わらないところは単語で表現してみたり、ジェスチャーを使ったり、時には翻訳機を駆使して自分の伝えたいことを必死に伝えていました。伝えようという意思が伝わったのかその日から積極的に話せるようになりました。

でも、英語の話せる友だちは何気ない話をホストシスターと話していてやはり、英語が苦手な私が参加しない方が良かったのかなと何度も思いました。

しかし、そんなある日ホストシスターのアニサが「ありがとう」と言ってきました。アニサが日本語クラスで日本語を習っているのは知っていましたが、いざ言われてみると心が暖かくなり嬉しい気持ちと同時に器用に上手く話そうとしなくても大丈夫なん

だと思いました。伝えようとする意思が大事なことに気付かされました。

アニサは私たちのために月曜から金曜日までの予定の計画を緻密に立ててくれました。食べられないものや好きなものも把握してくれていて本当に感謝しなかったです。特にホストシスターのアニサは今でも連絡を頻繁に取っていて、仲良くしています。

北区のプレゼンテーションは市民や市議員さんの前で話すのは緊張しましたが、最後に暖かい拍手を頂き北区の良さも伝えることができました！また、市の学生さんたちや地域の人たちがスピーチをしていて、このようなことが頻繁に行われているのはなかなかないのでとても関心しました。

ホームステイの最終日の前日には、アニサからお手紙とプレゼントをもらいました。お手紙は手書きで日本語で書いてありました。このホームステイで私は、アニサの優しさに何度も元気づけられました。初日からの思い出が走馬灯の様に流れていき、寂しい気持ちと同時にもっとここにいたいなと感じました。私とルームメイトはアニサに英語でお礼の手紙を書き、渡しました。

最終日、ホテルで別れを惜しみながら、また絶対会おうねと約束しました。

私が今回訪れたホームステイ先は、私たちを家族同然の様に扱ってくれました。またウォルナットクリーク市では私たちをととても歓迎してくれて、街のことやパブリックアートなど、沢山のことを教えてくれました。アメリカへ行く時は必ずウォルナットクリークに訪れたいと思います。

十分な英語が出来なかったのが少し心残りですがそれも含めて自分の欠点やもっと英語力を伸ばしたいと思えたのでとても良い経験になりました。

この経験は私の将来の選択肢のひとつになりました。また海外へ行けるようにしたいのと、2年後、ホストシスターのアニサが北区へ留学しに来るのでその時にはもっと話せるようになっていたいと思います。

本当に良い10日間になりました。

「ホストファミリーの紹介」

私がステイさせていただいたお家はインド系のお父さん、アメリカ人のお母さん、17歳のノンバイナリーのカイと14歳の女の子のロビンの四人家族でした。

アメリカは家がとても大きく、ホストファミリーの家の庭にもバスケットコートと鶏小屋、ホームパーティ用のダイニングがありました。

17歳のカイが主に案内をしてくれて、ダウンタウンに行ったり、ショッピングモールに行ったりしました。

家では、リビングでゲームをしたり、カラオケをしたり、お寿司を作ったり、家族でたくさんのかんごとを経験させてもらいました。

家族仲がとてもよく、初めてのアメリカで過ごしやすいようにサポートしてくれました。

ホストファミリーの方々のおかげで楽しい一週間を送ることができました！

「初めてのアメリカ」

幼い頃からたくさん海外に行っていましたが、アメリカ本土には行ったことがなく、初めてだったのでとても緊張していました。

九時間という長いフライトも初めてで、出発直前に食べたお昼ごはんは、最後の日本食だったのに緊張のせいでほとんど味がしませんでした。

そしていざアメリカにつくと、日本と全然違う雰囲気には圧倒されました。

元々、日本の気候や雰囲気があまり合わなかったこともあり、海外大学への進学、そして将来的に海外で暮らしていくことを考えていました。

ですが、その前に実際行って雰囲気を知りたいと思い、この派遣に参加しました。

そして、実際にアメリカに行ってみると、すごく自分にとって息がしやすいように感じました。

アメリカにいるときは常に自然体の自分でいられているように感じました。
それは、私のホストファミリーであったカイの影響も大きいと思います。
ホストファミリーの紹介で上げたとおり、カイはノンバイナリー（男性、女性という性別のどちらにもはっきり当てはまらない、当てはめたくないという考え）です。
アメリカではそういうポリシーに対しての理解が日本より進んでいると思いました。
日本だとまだまだ性自認の多様性に対する理解は進んでいないのが現状です。
島国で同一民族というのもあると思いますが、排他的で差別的な発言をする人も多くいます。
ですが、アメリカは移民国家であるためか、「他人は他人、自分は自分」という意識が日本よりはっきりしていると思いました。
他人に興味が薄いため、ほかの人がどのような格好をしていても、ポリシーを掲げていてもそれを批判したり画一化しようとせず、「まあ、そういう意見もあるよね」と受け入れることができるのだと思います。
それが合わない人もいるかもしれませんが、私はその他人に無関心なところがすごく自分にあっていると思いました。
今回、10日間という短い期間でしたが、たくさんの貴重な体験をさせていただきました。
そして、将来アメリカで暮らしたいという思いがより強くなったと思います。
そのためにもこれからも英語の勉強を続け、将来につなげていきたいです。
このような貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました！



**2023年 北区青少年交流団
ウォルナットクリーク市派遣報告書**

2024年（令和6年）1月発行

編集・発行

北区 総務部 総務課

〒114-8508 北区王子本町一丁目15番22号

電話 (03) 3908-9308